

佐賀県医療センター好生館看護学院 令和7年度自己評価

分野	項番	評価項目	取組実績（令和7年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
学校運営	1	学校のビジョン及びそれを実現するための組織目標を策定しており、教職員に理解され看護学院の年度目標に反映しているか。	好生館の中期目標及び学院の教育理念、教育目的に沿って組織目標を設定し学校運営に当たっている。 年度目標を具体的な行動レベルに落とし込んだことで、目標を達成する取り組みが段階的に着実に実施・評価できている。	○		
学校運営	2	学院の運営に関する委員会の目的が明確であり、十分に検討されているか。また、決定事項は周知徹底できているか。	以下の7つの委員会を設置しており、学校運営において検討すべき事項を協議し、結果は必要に応じ職員及び学生に周知し、公表している。ただし、委員会の実施要項が未整備なものや、開催されていないものがある。 ① 入学試験委員会 ② 学校関係者評価委員会 ③ 教育委員会 ④ 保健委員会 ⑤ 図書室運営委員会 ⑥ 情報管理委員会 ⑦ 高額教材購入検討委員会		○	
学校運営	3	より良い学生を確保するために、入学生の募集活動の充実を図り、志願者数の増につなげているか。	志願者を確保するために、次のような取組みを行い、助産学科一般入試で4.1倍、看護学科入試で2.4倍の志願倍率を確保した。 ・県内の高校17校の進路指導室を訪問し、学院のPRを行うとともに、生徒の進学希望状況の情報収集を行った。 ・高校の校内で開催されるガイダンスについては、当学院に進学実績のある3校に参加した。 ・学校説明会（オープンキャンパス）を夏期（7月末～8月初め）に4日間開催した。助産学科が延べ4回で61人、看護学科が延べ8回で135人の参加があり、併せて昨年度より51人増加した。 7年度の改善点として、申込み方法を2次元コード入力に変更し、時間を問わず簡便に申し込めるようにした。また、保護者の同伴も可能とし、保護者が知りたい情報をしっかりと伝えることができた。 また、新たな取組みとして、看護学科は学生が内容を企画し案内することとし、参加者アンケートでは概ね好評であった。 ・3月に小中学生を主対象とした看護体験会を実施し、希望者には学院の概要や入試情報の説明を行った。 ・学院の紹介パンフレットは、県内の高校へ配布、及び佐賀駅バスセンターへ配置したほか、看護協会、県内公立図書館等へ配布した。	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和7年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
学校運営	4	卒業生の県内就職率を高めるために、学生への情報提供等が充実するよう工夫をしているか。	入学者説明会の時点から県内の就職情報を積極的に紹介し、入学後も折に触れ県内就職を推奨している。 （助産学科） - 入学後早期に個人面談を実施し、学生の意向を確認し指導している。令和7年度は12名中7名が県内の医療機関に就職した。県内就職率は58.3%で令和6年度の66.7%より下回った。 - 県内のクリニックは実習先を含め2か所が相次いで閉院し、県内の求人が激減している。少子化が進行し、学生の県内就職希望数と求人数が見合わない現状が今後も続くことが予想される。 （看護学科） - 折に触れて県内就職の良さを学生に強調し、相談を受けた際は県内就職を推奨した結果、令和7年度の県内就職率は90.4%と昨年度を上回った。 - 佐賀県主催の就職関連イベントを積極的に紹介し、「看護学生&若手看護交流会」に3年生が、「合同就職説明会」には2年生42名全員が参加した。	○		
学校運営	5	災害など非常時に学校活動が継続できる体制が整っているか。	非常時に学校活動を継続させるために、次のような取組みを行った。 - 非常時にLINEを使って学生に一斉連絡できる体制を整え、実際に通報訓練も行った。なお、緊急時は職員が学院に出勤せずとも自宅でスマートフォンから送信できるようにしている。 - 台風や大雨・大雪の場合、休校の判断を当日朝6時半までにLINEで一斉連絡することとしている。 また、自宅周辺等の状況により登校が危険と判断した場合は、自らの判断で個別休校とすることができる。その場合は欠席扱いとしないこととしている。 - コロナ禍の経験を踏まえ、感染症蔓延時等にZoomでの授業ができる体制を整えている。	○		
学校運営	6	学院として積極的にボランティアに参加するなど社会貢献に努めているか。	（看護学科） 学生は1型糖尿病のサマーキャンプ、唐津湾の清掃活動、高齢者サロン、地域の草むしり、おにぎり会など多くのイベントや行事に参加し、地域の方々から感謝の言葉をいた	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和7年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			だいた。 ・1年生は全員何らかのボランティアに参加し、社会貢献だけでなく、自身の社会人基礎力を育むような体験ができた。 ・2か所の保育園から園児訪問を受け入れ、学生と交流する機会とした。 （事務） ・近隣の2か所の保育施設からの要望を受け、水害等の災害時における緊急的な一時避難所として、学院の施設使用に関する覚書を締結した。			
学校施設	7	講義や実習を行うために必要な施設整備を行っているか。また学生の自主的な学習の場が確保されているか。	（助産学科） ・移動可能式電子黒板（書画カメラ付）を新たに導入し、画像がより鮮明に、機器類の接続の手間もより簡便になり、学生のグループワークの共有が容易になった。 ・近年の学生にとって視覚情報は非常に重要視される傾向がある。そこで、分娩室に似せた環境下でのシミュレーション教育充実のため、救急カートや未熟児モデル、新生児ベッド（コット）を新規購入し演習で活用した。また、実習先の増加及び既存の教材の老朽化に伴う入替えのために、分娩シミュレーター、バイタルサインベビーを購入し円滑に講義・演習運営が行えた。 （看護学科） ・令和6年度以前に採用した電子教科書や動画サブスクリクション、国家試験対策のe-learning「看パス」は定着し、学生の自主的な学習に寄与している。それに加え、令和7年度からクラウド型授業支援アプリ「ロイロノート」を導入した。導入に大きなトラブルはなく、グループワークや学習活動の円滑化に繋がった。 ・電子黒板を導入し、プロジェクター使用時より効果的に動画で演習の振り返りが出来ている。 （事務） ・多目的ホールの音響設備に不具合が多かったため、設備一式を更新した。また、プロジェクターが老朽化し視認性が低下していたため、新型機器に更新し機能も向上した。 ・研修室、コモンスペース、図書室、食堂等を自習室として	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和7年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			開放することで自主的な学習の場が確保できている。その際、希望に応じエアコンを稼働させ、快適な学習環境を維持している。			
学校施設	8	図書室の整備や福利厚生施設の整備等、学生のための環境整備は行われているか。	学生のための環境整備として次のような取組みを行った。 ・学生寮の屋根の張替工事を行った。（県発注の長寿命化工事、工期約4か月） ・学生寮の洗濯室の壁が埃やカビで傷んでいたため、壁紙張替及び換気扇更新を行った。また、洗濯機が老朽化してきたため、半数の3台を新品に更新し、新たに乾燥機も3台設置した。残りは次年度更新予定。 ・学生寮の厨房の業務用大型冷蔵庫が老朽化したため、使い勝手の良い家庭用サイズの新品3台に更新した。 ・学生寮居室のベッドは寮開設時から継続使用し老朽化していたため、7年度は4階全室のベッドを新しいものに更新した。今後、順次更新していく予定である。	○		
教育活動	9	卒業時において持つべき看護師・助産師の能力を、教育目標に明示しているとともに、卒業時の到達状況を分析しているか。	（助産学科） ・教育目標をシラバス、実習要綱、学生便覧に明示し、折に触れ周知している。 ・全国助産師教育協議会の「助産師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と達成度」を活用し、卒業時に学生の自己評価、及び結果の分析を行った。 ・臨地実習前に知識・技術・態度を統合した臨床実践能力を客観的に測るためOCSEを行い、一定レベルに到達していないと判断した場合は、合格基準に至るまで再試験を行った。 ・形成的評価に加え、卒業時に分娩介助技術評価と総合評価、実習記録についての評価・分析を行った。実習指導者会議で分析結果を実習施設と共有し、改善が必要な項目は次年度の課題とした。 （看護学科） ・入学時及び各学年の初めにシラバスを用いて教育目標の説明を行い、浸透を図っている。その際、教育目標を基に学生自身がクラス目標を立て、共通認識する機会をつくっている。 ・3年次には知識・技術・態度を統合した臨床実践能力を客観的に測るためOCSEを行い、卒業時のレベルに到達して	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和7年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			いないと判断した場合は繰り返し指導を行った。 また、3年間の実習を振り返り、その学びを主たる実習施設である好生館に伝え課題を話し合っている。			
教育活動	10	学習内容は、教育理念・教育目標と一貫性があり、時代の要請に応える内容になっているか。	教育理念・教育目標に沿った講義・実習を行うとともに、時代の要請に応じ構成したカリキュラムを実施した。 （助産学科） - 正常妊娠・分娩を学修の基本とするが、臨床現場ではハイリスク妊娠・分娩が増加傾向にある。そのため、実習施設の協力を得ながら、ハイリスク妊娠・分娩の観察・ケアを段階的に学ぶ機会を設けることができた。 - 地域母子保健実習では、助産所、産前産後サポートステーションなどで助産師の役割について学び、将来のキャリアビジョンに繋げることができた。また、助産所実習では2名の学生が分娩介助を学べる貴重な機会を得た。 - 令和7年度より前期実習の1日を地域に住む母子の同行訪問に充て、退院後の母子の生活環境を学ぶことで、臨地実習での退院指導時、暮らしに即した指導に活かすことに繋がった。 - 事例検討や研究の基礎、全国母性衛生学会への参加（東京都）、ポートフォリオ作成などを通して、学問への探求心と助産師として生涯学び続ける態度を養った。 （看護学科） - 地域包括支援センター見学を取り入れ2年目となるが、令和7年度も13か所の協力を得ることができ、学生は地域住民の生活を支えるきめ細かい支援や地域性を活かした支援について学びを深めた。 - 入退院支援センター、地域医療支援センターでの実習・講義を取り入れたことで、退院後の生活を踏まえた看護の重要性を学んでいる。 - 令和6年度に取り入れた認定看護師の活動を見学する実習では、複雑な健康問題を抱える患者や家族への看護を考え、その認定看護師が活躍する母体病院の地域医援病院としての役割を考えるきっかけとなっている。 - 佐賀県医療センター好生館をはじめとした認定看護管理者2名、専門看護師3名、認定看護師23名を講師に迎え、専門性の高い講義を実施した。	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和7年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
教育活動	11	授業計画は、教育課程との整合性があり、授業内容や指導方法が学生レベルに合うよう工夫・改善されているか。	（助産学科） - 講義は正常から異常へ、妊娠期から分娩期、産褥・新生児期へと学生が理解しやすい順序となるよう時間割を調整している。 - 地域母子保健実習では、前期から後期にかけ時期を分散し講義・実習を組んでおり、臨床実習での経験と統合し、「地域に暮らす母子」についての学びがより深まった。 - ハイリスク妊娠が増加している現状を踏まえ、実習前にOSCEや産科危機的出血等のシミュレーション学習を活用し、臨床判断能力の向上に努めた。 また、好生館の助産師に2日間講義・演習に参加してもらい、現場に即した助言により実習内容や行動のイメージ化ができたとして学生から高評価であった。 （看護学科） - 教育課程に沿った授業計画を作成している。 特に概論から各論、疾患から看護など、学生が理解しやすく、且つ学びの積み上げができるよう順序を考え時間割を組んだ。また、各実習に必要な講義は実習までに受講するよう進度を工夫し、実習で知識・技術が活用できるようにした。さらに各学年の進度に合わせ授業内容を構成し、学生の理解度を確認しながら授業を進めた。 - 実習で必要な知識を応用し、臨床判断能力を養うため、シミュレーション教育を実施した。実習を経験していない学生であっても事前にロールプレイングを経験させることで、対象の心理状態にも理解を示すようになった。また、各実習に入る前に実施したため、実習のイメージがついた等、学生にも好評であった。	○		
教育活動	12	単位認定の方法（評価基準や方法等）を、各科目担当者が理解しており、評価については妥当であるか。	（助産学科） - 外部講師にも講義初回に評価基準・方法を説明し理解を得ている。学院教員と共に評価計画・評価方法に沿って妥当な評価を実施している。 （看護学科） - 評価計画を基に外部講師・学院教員ともに妥当な評価を実施している。	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和7年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
教育活動	13	実習目標が達成できるよう実習施設との連携を行い、学生を支援する体制は整っているか。実習計画は施設に周知されているか。	（助産学科） ・実習開始前に各実習施設に出向き、個別に打合せを行っている。実習要綱及び実習指導要綱を配布し実習目標を共有している。 ・実習期間の節目に反省会、または必要時に指導者との話し合いの場を設け早期に調整を行ったことで、実習目標の達成につながった。 ・年度の途中で実習施設の閉院等があり学生の実習先確保に苦慮した。年度初めに臨時実習施設として2診療所を開拓し、既存の施設にも実習期間の延長などの相談・調整をこまめに図り対応した結果、年内に全員が介助10例の目標を達成することができた。 ・3月に実習関係機関と助産学実習評価会議を行い、実習全体の評価を指導者と共有し、次年度の実習指導に役立てている。 （看護学科） ・医療機関、保健所、市町、訪問看護ステーション、保育施設など、多様な実習施設に応じて、臨地実習指導者会議または個別の打合せを実施している。その際、実習目標が達成できるように学習内容や指導方法の情報共有を行い、実習計画を周知させている。 ・実習期間中は、会議以外でも各実習施設の指導者との連携を密に行い、実習計画や指導方法の調整などを行った。	○		
教育活動	14	学生の実習時のインシデント事例や感染リスク等について、教員は把握・分析を行い、学生指導に生かしているか。	各学科のインシデント発生状況は次のとおりであった。 ケースごとに要因分析し再発防止策を講じた。 （助産学科） ・令和7年度は、過去最多の28件の報告が上がった。うち1例がレベル3であった ・急増の背景には、同一学生による複数のインシデント、内容としてはコミュニケーションエラーに関連した「報告・連絡・相談の遅延」や「危険行為・手技誤り」が目立った。 ・学生には、折に触れ、どこにでも誰にでもインシデントを起こしてしまう様々な要因があることを指導し、他人事ではなく自分事として捉えるよう意識づけを行った。	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和7年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			（看護学科） - 令和7年度のインシデントレポート報告件数は21件で、昨年度より増加した。 レベル別では、レベル2が21件全てであった。 内容別では、情報管理が16件、情報伝達が3件、療養上の世話（誤嚥リスクがある患者に飲水を行った）が1件であった。 インシデント発生時は、学生と教員で原因を分析し、防止策を考えさせた。起こりやすい発生要因に関しては当事者個人だけの問題とせずクラス全体で共有し、振り返りを行った。 - 実習記録の保管や印刷、取り扱い等について、自分の行動を振り返らせ、今後どのように行動したらよいのか考えさせた。学生同士で話し合い、自分なりの意見を持つことができ、意識づけとなった。			
教育活動	15	国試合格 100%を目指すか。	（助産学科） 下記の取組みを継続的に行い、合格率 100%を維持した。 - 入学前に過去問題を提供し、解答の根拠を調べたノート作りを指示し、学生の意識を高めた。 - 入学後は毎月学習状況を把握し、学生に合わせたサポートを行った。また模擬試験及び過去問を解き、結果を教員と学生で分析し、不得意分野の攻略法を指導した。 - 年々、個別サポートの必要な学生は増加傾向にある。個別指導は試験直前までの長期間に及び最終的には教員がマンツーマンの支援の形をとり、習熟度に合わせ方法・内容を工夫しサポートした。 - 令和6年度から全国助産師教育協議会が主催する CBT（コンピューターベースドテスト）に参加している。理解度を客観的に確認する機会となり試験対策につながった。 （看護学科） - 業者による国家試験対策講義を複数回取り入れた。 - 成績が低迷していた学生に対しても教員の講義、グループ学習、個人学習への支援等、その学生の個別性に合わせ学習を支援した。 - 全学年の国家試験対策委員と教員で構成する国家試験委員会を定期的に開催し、以下の取組を学生が主体的に実施した。	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和7年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			① 各学年の担当が週に3回、過去問から選抜した国家試験問題をクラスに共有し、日常的に問題に触れる機会を作った。 ② 実習中は毎日、それぞれのグループが実習中の内容に関連する国家試験問題を1つピックアップし、回答・解説を考え教員にアウトプットする取組を実践した。 ③ 教員、下級生による国家試験激励会を開催した。 このような取組の結果、3年生全員国家試験に合格した。また学生アンケートにおける学院の国家試験対策への満足度は89%だった。			
教育活動	16	教員に各種研修会への参加、研究調査活動の機会を与えるとともに、教員自身も自己研鑽に努めているか。	（助産学科） ・全国助産師教育協議会主催の「ファーストレベル研修」を2名が受講し、助産師教育の基礎について知見を深めた。 ・そのほか、各教員が自己の目標に沿い計画した各種研修に複数参加し自己研鑽に努めた。 （看護学科） ・日本看護学校協議会主催の新人教員研修会に2名、日本看護学校協議会学会に2名、日本看護サミットに2名が参加、1名が日本看護学校協議会主催の教務主任養成講習を修了した。他にも専門領域や担当業務に関するものなど複数の研修に積極的に参加した。	○		
教育活動	17	授業評価を実施し、授業の改善に努めているか。	・令和7年度は教員同士での評価の実施率100%、他教員の講義の聴講を1人2回以上、を目標とした。授業評価のハードルを下げるため、オープンクラスと名称を変更し、評価内容も建設的なものに限ることを周知した。その結果、教員同士での授業評価実施率が100%、他教員の講義聴講2回以上の実施率も100%を達成した。 ・授業評価の後、聴講教員とカンファレンスを行い、有意義で建設的な振り返りができた。また、ユニフィケーションの一環で助産学科、看護学科ともに好生館のスタッフに講義を聴講してもらう機会があり、臨床側からの貴重なアドバイスをいただくことができた。	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和7年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
学生支援	18	進学、就職などの進路に関して学生の相談に十分応じているか。	（助産学科） ・入学早期から個別面談を実施し、学生全員に意向を確認し、個々の就職活動を支援している。 ・就職支援としてジョブカフェやマイナビの研修を取り入れ現在の就職活動の実際に触れる機会を設けている。学生個々の要望に応じて、履歴書作成、論文や面接の指導を行うなどサポートしている。 （看護学科） ・入学時より定期的に面接を実施し、進路のアドバイスをを行うとともに段階的にマイナビの研修や学内教員の講義をとりいれ、就職活動の方法や自己分析、病院分析や小論文対策について指導を行っている。 ・2月には3学年合同で、進路について3年生から体験談を聞く機会を設けている。 ・3年次は学生全員に担当教員をつけ、履歴書作成指導、小論文指導、面接対策など丁寧にサポートを行っている。アンケートでは91%の学生が「十分な支援を受けた」と回答した。	○		
学生支援	19	学生の健康管理のための体制の充実が図られているか。	・好生館に校医を依頼し、相談しやすい体制を整えており、校医にも親身になって対応してもらっている。 ・インフルエンザワクチン及びB型肝炎ワクチンについて、毎年好生館で接種させている。 ・定期健康診断で異常が見られた学生には受診勧奨や生活指導を行っている。また、感染予防の指導を行い、感染症が疑われる場合は受診を勧め拡大防止に努めている。	○		
学生支援	20	学生に対するメンタルケアの充実がなされているか。	（助産学科） ・課題、テストに並行し実習、就職活動を行うなど入学後の1年間は非常に多忙な生活である。特に実習中のストレスは大きく、例年その時期にメンタルの不調をきたす学生もいる。入学早期に学生全員がスクールカウンセラーと面談を行ない、困ったときに気軽に相談できるきっかけづくりを行った。 ・令和7年度の学校医のメンタル相談の利用はなかったが、必要時には校医に相談できる体制を整えている。また、学内教員が適宜面談を行い、教員と指導者間でも情報共有し、学生支援を行った。	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和7年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			（看護学科） ・気になる学生については早めに声をかけ、教員が面談するとともに必要時はスクールカウンセリングを勧めた。また、教員間で情報共有を行い、統一したかかわりを持つようにした。 ・また、カウンセリングを気楽に利用してもらうため、学生全員に対してスクールカウンセラーとの顔合わせを図った。			
学生支援	21	経済的に安心して学業に専念できるよう支援の充実がなされているか。	・文科省の「高等教育の修学支援新制度」の対象機関としての申請を行い、継続認定を受けた。 ・令和7年度は32人の看護学科学生が給付型奨学金を受給した。（助産学科は対象者無し） 当該制度の対象要件が拡充され、上記給付型奨学生を含め47人に入学金・授業料の減免を行った。また、学生が行う給付型及び貸与型奨学金の申請及び継続の手続きを支援した。 ・好生館独自の奨学金制度（月額5万円、就職後返還免除有）が設けられており、令和7年度は9人が貸与を受けた。 ・助産学科は厚労省の「専門実践教育訓練給付金制度」の対象講座としての指定を受け、学生の受給手続きを支援した。令和7年度は6名が受給した。	○		
学生生活	22	交歓会や学院祭、クラブ活動などを通じて学生相互の交流が図られるよう、支援しているか。	（助産学科） ・助産学科学生によるピア講義を看護学科1年生に対し行った。 ・学院行事では看護学生と協働し役割を担い、積極的に交流できた。 （看護学科） ・学院行事のみならず、看護の探究、キャリア論、基礎看護技術や中範囲理論を活用した合同講義、看護技術演習等で学年を超えたグループ活動を取り入れ、教え合いを行う機会を設け交流したことで相互に学習効果が見られた。また、それによって自己効力感が高まるとともに、それぞれの学年のモチベーションアップにもつながった。	○		